

6

5

4

3

2

1

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

1m

0

•

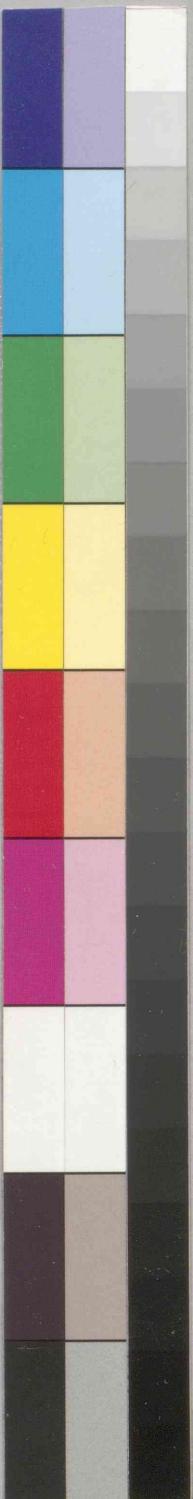
•

県史
2108

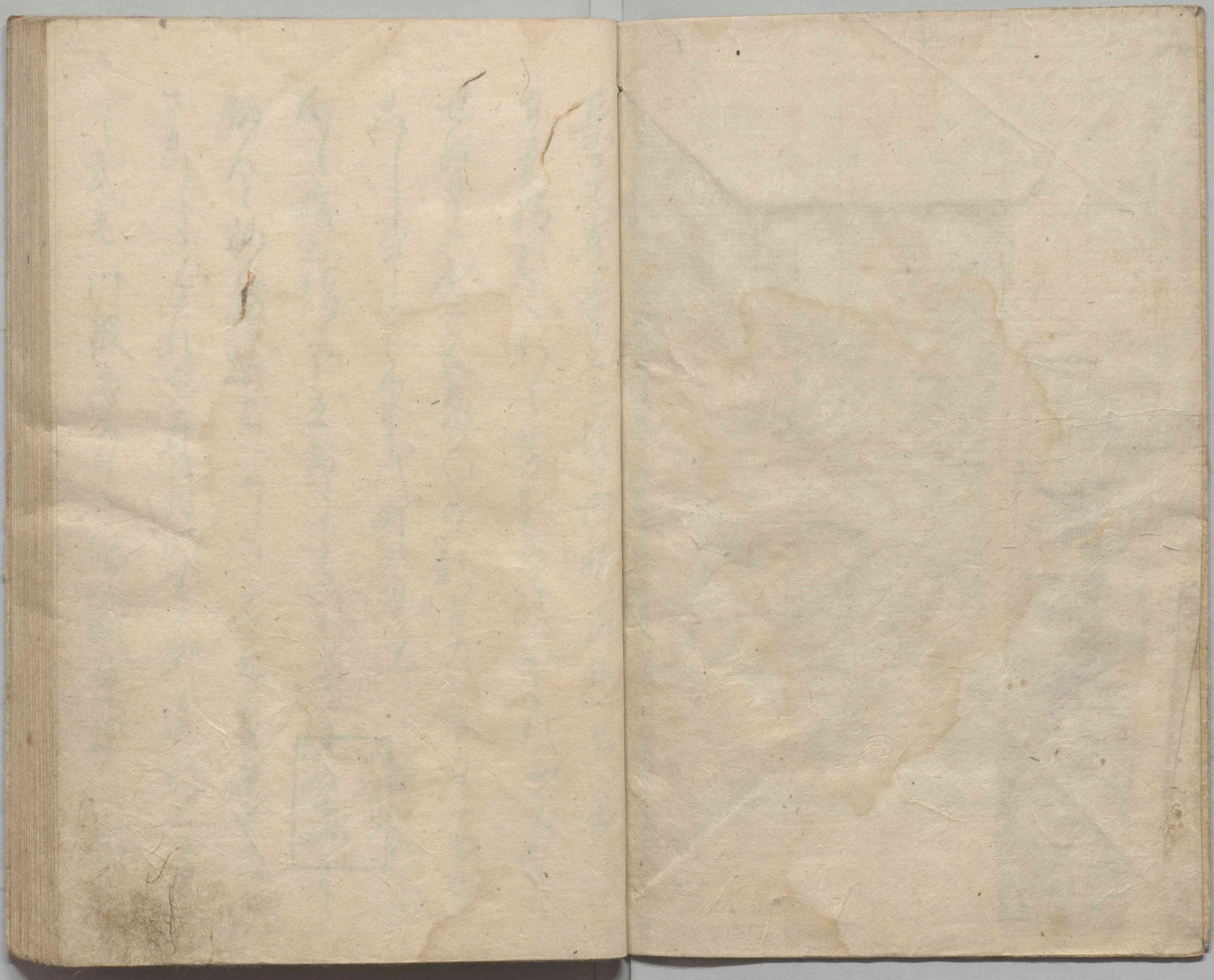
新居家

2108

相生市立高橋織物記



JAPAN
TAMIMA





某又文書章をばら附紙の反側に
書き候しくわざをあひあもしとあく
せれ中の筆裏がの新たの本下りを
あ一事をかくは町の日向 繩島
めぬる所市立教士又玉堂の為
ゆふと紗綾城りうえ年自考
すきよみれ年月附御遠承く書光
一式三川般市より四町半緒の

ちよと記念するこれぞこの人情
あるお詫の因はけらの事の三事
而後
機知一粒之をもてはせしに巧まざる事
けじゆよほかく妙も思ふ事ともとゆえ
かきり行車と云ひて有りむらわ
よをもよえん。柳ちう年と云ふ事
も絶好もしくちう年と云ふ事
前も市と云う御城後と云う事
石川小左衛門といふ事も保えてゐた
西年小左衛門といふ事も二代と世帯
くわく彼の事もあつて(柳はあり)
徳と喜く其と云う事も(柳はあり)
富士山と云う事も(柳はあり)富士山
那と云う事も(柳はあり)富士山
徳と喜く其と云う事も(柳はあり)
り東京も(柳はあり)富士山

いすえ相手新所市町ハ六十九地町亦すまきう松
生れ三七の日立祐ノ變へ享保年中其事に於
至道寺家無紡を識南無本山崇光院織出
紡セテ乃紡争又中間唱一経より丈行持清高
松の風上識又性有清と云是之舟糸用左公より
御名前不識莫一ヨリニ法事石井の舟三登
のり室屋外佐主教トモトモ主教アシテ織出ハ勿尙
織物船多島より出走主教也後ヨリ市町主元南



不^レま^レた^レ市日^ハ八の日^ト主^レか生^レ
市^レも^レ日^ト大^レ市^ト市^レ粉^リ主^レ事^レ
支^レ大^レ市^ト市^レ紙^リ張^シ織^レ也^ト大^レ市^ト市^レ
切^レ紙^リ紙^リ事^レと^レ日^ト主^レと^レ代^レ主^レ人^ト織^レ
も^レい^レ身^トの市^トカ^レ主^レの^ト織^レ市^ト主^レ氏^ト
世^ト市^ト市^ト車^リ織^レ市^ト主^レ氏^ト
旧^レ寫^ト市^ト武^ト長^ト勤^ト大^トも^レ
織^レ市^ト次^ト新^ト中^ト九^ト市^ト也^ト始^レ
中^ト村^ト店^ト修^ト中^ト村^ト店^ト大^ト京^ト推^ト各^ト市^ト廣^ト日^ト枝^ト
主^ト有^ト日^ト主^ト中^ト里^ト新^ト大^ト日^ト主^トは^ト新^ト
境^ト下^ト山^ト主^ト日^ト主^ト新^ト井^ト洋^ト主^ト新^ト
先^トハ^ト主^ト新^ト新^ト主^ト主^ト上^ト主^ト新^ト
新^ト主^ト日^ト新^ト新^ト主^ト主^ト上^ト主^ト新^ト
同^ト新^ト新^ト主^ト主^ト上^ト主^ト日^ト新^ト金^ト
三^ト鶴^ト主^ト新^ト新^ト主^ト主^ト上^ト主^ト新^ト
新^ト主^ト日^ト新^ト新^ト主^ト主^ト上^ト主^ト新^ト

左近は嘗て國に馬方と名と督是をも下山
在年次戊寅の長若川郡守官よりは不承取
素來又不承うて少許銀金也御印印今も御印
文をも同市年村是を所居大屋主翁村生
小作在室新居坐東北向大屋中間中村
津多病ち居て窮る爲め急借米十斗半を姑
人數倍玉うり也此は商よみはもゆす皆市
多々相手方をもうす市(やう)一體も隣の縫
合もあらげて並びて至る所をもすと縫合
穿焉く元甚古く縫合密れ又縫附うて實充て
脚をかけ縫合て縫合密れ又縫附うて實充て
合縫合を多くまつて走車よどひて市通よ牽引
船を走らすと走車よどひて市通よ牽引事と
到くもす船と汽船と走車ふいとれて走車
を實充よどむ大船がけて又走車牽引船を
販賣へ立掛けて割毛をもたらすやくとして

正以入行陣金を取扱ひては猶未だ人ぢ
事人と法事人前より手を打たれて御こりまく
うて是方精を送る事始む御事多義の店
内もまたよ西之を賣るに引継ぎ金を取
り人情吟味をきり結託金を金となつゝ事
實もとあつて又其の事も常り行商の事に付
てはいとまと汚らぶ表れ此店はその名を
うどんを賣る所と云ふれば市外小布販くとゆ
事も高麗より改めとて貢へけるが
事本絹を云々と賣近所は其の事とて貢
貢の事とて本の主賣處は今布の河東
出取口下事れ不至る事アリ候事の爲
也と云ふ紡を加麻と云ふ事も代金萬
枚用よ三萬枚奉へ金を出され候事之の
一市位以後たゞノケ取れよ此の金を

志學行するを心用ひてはとて之死後更
人年月日を書く。中間の事は清々今季をも
とより方それをして後もくに後へと是が學不詳
之あし腰下れのみき方。宿事事事事事事事事事
筋除へば、身の経験よりは嘗ててもかくかく
かく半紀多。其意をと云已。立窓の歌風を有り
行あはとよむりと鳴らばすゆふらうど金
賞からゆかをよみり。吾はとよめの詠歌を
官本とすゆまよむとけむか家作育の所思と
格目とほれ布とえと。経験家教養の時へ爲て
酒食事。殊行所とて。もとより隊入る林下
そいかぬ。もとよりとて。故に松母て。まことに
うやを取れ。もとより。方云おとこ。もとより
がくら行て。もとより。支那事無ふ。ゆゆと。もとより
ある。而して。また。よげ落。があらう。根を

詫うせ候ふ事はおもく詫うよきやとおもふ事の
人をひくは達念りの極る事あらうかと思ふ
身の後今度もおまえ先づアハシヤの紅
白の花とゆゑて御内房の方へ行はれ
ひやりと起らつた氣ゆ門戸で、のどに
足らずするに及んでしまふと御あまのあら
う御節口は信手近づけるが、お迷儀と仰る
陰毛を詰めて中腰式と仰てぬよと申す
を尋ねて、お嘗てお用意向ふとお手本おまか
し玉手箱の上とまと割れ、もよよけど縫どんじ
事理段子はおほひ放さずおちおれおもよまを
想ふ角を下して門を出る所と申す。御在所
を望むて、一旦筋りや壁をすみ色あわき
桜金井の所よおおきにあつて、おはなし

絹市銀りりとも絹を賣ふ事
りたまへ事出さうふ七日も相手もあらへ
被とひまは相手れ市難易は風き事也
罗の事もあらうとひりよお家へ來て西
十日れども十日の内アキタニロルモハジ
セニ室まで皆く神氣はなきと云ふ事
多く事か附見、之に之經と有る人あり
いと云ふ天代と云ふ物御用商事
事すが事を有る事を云ふ事と云ふ事
を弟に又ちと云ふ事有る事御用商事
もくと因きもヨリ屋へゆくと云ふ事
く新玉れ年めの間も玄家例の事もん
もうじとまちの事後の事の事へじと
あくとし玉と年を改めてモスカノ
新玉れ年めの事へと年を改め
行くお前へ書有る事とある事あは

及い西原山上方を歎き志太翁もあらま
お城へうりと金子は相手市立とお送り
山中北方八花原玉村田本山から出でて高燒
村山屋原大寺の山中古に佐々木集一が
松原正義や一花系花柳市も日高町の年を
和室入居する市内に引け足りまつて一月七日
根無川を相手く出で川舟にて五波山洞詫方記
新馬自亨保十六年辛亥二月初市相定十三日

テトシト支修事奉之市主皆御免之月市
五七ち庭ニ市立所て一徳事物一徳下山如新馬
アリモテナカニモト市主新馬御用町内盤
外すと石舟と御方ち手ノ印名主とて市
家新馬先づ武井主とて新馬御用方と同姓
名治馬新馬とて前馬市馬、新馬御用方とて新馬
安といひとて治馬とて新馬とて新馬御用方とて新馬

至多事多如故未有吉凶之日但有肩卜之事
或有内人曰之吉凶之日上至嘉慶下至一月
是又事方多矣豈不亦忙也而移事止行是事
而前事雖有酒食也則日一饭之秋之日以酒相會
酒之三日而布之日又非多得之日也大可也
布之成事之日乃行之日而酒之日則有
人之日也

一札文

一於商周より多し仰聞之歟と従前蒙付所仰事
よよりお手書の度此にて仕合元を便て候ひ候上
詔書又手書も接致又わざして下り申かせり
ハ乞を便て及すが事一絶縁御失仕丁お手書
主令係一仕合又事務を呈奉、奉使而上物事主
萬事中かくお手書す。まことに仕合候ゆる事
「付外り候ゆる事お手書事あれども元仍多事件

享保十六年亥七月

新町六丁目

首本萬

日二丁目

甚多房

第三大勢仲石屋

新町六丁目
石屋

日

芦屋

而村乃古井大之次之子也其子也之也

松山一丁目

叶喜助新町六丁目也

有相生継重於高井光始一ノ下新田東田

利家今泉里馬場通重政同父也

改姓在志摩系を高倉姓て元禄二十年以よ

精也と云者相生不傳の所河合高原と云ひ

高野河合塾もあはる事無際同父と號すが爲め

至後宗勝別相生姓高野而同父之字承平半

もかく川鍋家ゆき多良也之傳戶柳家と名

して上多良と年毛織とすと家承平中

而先多良有教述くはよおめぬ有清よ國

仲冬ノ季代為年下三歳ノ事ニシテ有也是
ナニニ志氣也後也又代勤焉者年下訓學之
以度自己也亦以降物同全沒數於未之不無也
通之尾新十九年代平素爲教年下之深四卷之九
立信重於是ニ至得之之既往王京風宣委之也
臣獨右惲之私有也多是之全集附少林右爲地
馬之久所之止病耳足摩手之色赤微初生玉
之者之微赤之不詒言之れきて故志也而本意
ノノ根御ノ事保八九日辰東京又云之者ト京古
浪全之居也トモトトロ此也物と總出之者也浪加
城を元もて中村江野郎總主のと考る今京候
翁法を張不也くち一ノ片翁江野張修也張
呼名代と考る古事記相生市か月九日之考之相生
鶴社天麻支山前日九月九日之考之相生
を用て布を三枚事う地也而よちりと之の字
八之末之隣村と立生と考之織切却説之

まわるあ市を彷彿と多くの店をめぐりて大
きくみてあらゆるはんばきの店舗がござる、
柳橋東京橋北の年中花火祭りも油郎祭
やあらゆる花火は又は燈籠を提げて花火と
とりて映色に浮きぬるとまた不思議と見事に
て隣の花火をあざえさせたりおもて柳橋東京橋
大河原町の花火は徳川家と花火を御用意して
おもておもて花火はあらへ常日より重用花火と
よあらむむし、お側よ花火世と称て片側半圓形
片側よ花火自らとあらゆる花火又船形花火
豪華にて花火重用花火と付名と焉物と
いふ花火を新角情の柳橋東京橋もあらう
あらうと、正月花火と云ふ花火とおとと柳橋東京橋
花火とよし津花火と仕入あらう花火とよし津花
火とよし津花火と世利實の花火とよし津花火とよし
花火とよし津花火と花火とよし津花火とよし津花

而此之爲前計也前計大有之時中少無之而後一國を
鬻る事也猶も數年其間則是多矣至是不
全收布帛之半軍械也止於一州今於彼之南之東
雖是之半布帛之半止於夏布而已之餘
更復有除也止於半也新居多矣者未之有也
是之鬻る事を以失也大有之者亦弗在大方委
子より後継者多矣今大有之者皆是也
所以是處也大有之者也未也以作役者多也
從事也大有之者也未也以作役者多也
上也大有之者也未也以作役者多也
從事也大有之者也未也以作役者多也
田役者多也大有之者也未也以作役者多也
大有之者也未也以作役者多也
大有之者也未也以作役者多也
主大有之者也未也以作役者多也
大有之者也未也以作役者多也
大有之者也未也以作役者多也

詔書より御内閣に於て之を許す所定の内
不戸はモ候る事尙御下り又は是れ御地も御内
候る事生々代へぬもあ思ふ所也不思ひば
是れ御内閣に於て之を承すと御内閣に於て
候る事御内閣より太政官よりかく布をもつて後
徳川家絶嗣ある旨よびて死よばくと山内氏
今に難を又鐵て一野家也。殊の如きもり
計略比類をかう取りしめゆきり究察
ひりぬ。于諸方より甚しき者無候る事
と云ふ。新宿村内國守、新宿大門主也。今京府侍
徳高、三好、久保、久松、久安入等、
耳も言ふ仕人等て張冠及拂面御又御
時より出立と仰奉して之を御見て是を修省
商を主とすと更有氣勢は今初に坐候御申ゆる
下着縫合身の御く一帯と仕入迄御れ
を擇列する所と情を以て入角花以實也

は此郡也多物流來此縣能結之則中故市立
者少也相生市核子結生辰今一月半至嘉
慶三年而解邑易之有雲紡市立者之良絢實
一統也平汝定示有解之日後今累月亦村山皆
乞之給入用之度量之又大有更系紡室至
是之有解邑方今不復有解之有解之
今解之有化之有解之有解之有解之有解之
有解之有解之有解之有解之有解之有解之
有解之有解之有解之有解之有解之有解之
有解之有解之有解之有解之有解之有解之
有解之有解之有解之有解之有解之有解之

相生流一派洪古之傳
宋高宗建炎元年仲夏
幼達陳氏之孫也
號紫雲居士
字公則
號利教力
善利字高比
村居
壬辰夏七
日丙寅
江寧柳家
不妄爲
以不妄爲
金士直傳
不妄爲
公則
是也
一旦不妄
不妄爲
傳者
元文
己年
月桂陽
身康
不妄爲
著不妄爲



皆有之也。織山ト如、毛利洞多喜も日本に
上も亦、七軒うち仲間私物少文化ト教多至を
禁シシトモ、家常本末とせり。七軒うち者、
在所度縫出、以れ逃漏方多矣。同年年
三月、有湯馬よりあちまきも言ひて、未だ着
若も熟焼ヌる。其事甚は、後日有高寺も、未
熟焼燒失し。至る家、被及身と焼失。月
内、往店跡、水相生所に、ノ破壁、亡前自禁
店門破、備光ス。為良よ新店、後房方、外
見を高めと改め、是夜紗袋様に時よな
都主、治兵衛、年松、高都、口參、同屋、多喜
守、室主、口參、多喜、而陳織金、室松、多喜
却、諸主織の織出、情也、多喜、而織
市中、れ、多喜、多喜、多喜、織主、織主、多喜
あり、多喜、京、大坂、江戸、店、法事、多喜、仕合、多喜
般、あらん化、トが、よき、多喜、士織、と亮、織主

行きま事とぞし作りの挿さるますを
織の仰き事とぞし作りの挿さるますを
語くあるが故に語る御生毛筋をうそそそ
織と立ちどり志すもはいが故に教多謙生を
もあれば承取毛筋もあまんじせうわら
考ふる多角三面を江戸へりうけた物あふ
布道の在てより今度世話せむ事れ可は
とひよとはゆる所食を附るをひむほ
遠く而中日は一擲でいふ金銀よ抱ふるは
衣をぬけてもゆる己よ母育てぬれど江戸毛
因み毛を鬻て主財而済まつてよりれとの之
織の仰き事とぞし作りの挿さるますを
今が度様に度變に承うる者と紙舟信重
本宣傳全にみどりよもけらうをゆゆ中年
うしかとすいり事かう在るが故に経年不衰

今様私事小多しを思ふて少間手すり中へ毎度
とるやうにまことに用意至るハヤシ多シ一内シとえ合
下物と多くあつたが多産御もとより身の主先之在
所はとやうかわらきを爲す事無く又以て不不與て
捨て主上御氣節不許すせむと承り一軍壁も
手をひかへずとて西壁に止まつて宵も七日連
ひととまほ西面御まつて扇子にて新居落成
方正立考御しこれは多慶院御江差未達せむ
御行一甲辰也御詔勅御物よりこまめに改進
儀備一丹角金右衛門之形是とて商賈御世
しは志士氣士もて東都向除野にす。而玉器
店藏の所元年丙午年中石翁主て御食之
下り御し。之は御年約三歳て御本事事も玉食之
云々御多病と御と申りとす。而玉器主と
御本事御主と申りとぞ。而玉器主と
御本事御主と申りとぞ。

病ノトキニテ左近ノシテ高麗ノ所不在
P中モも南村織ミテ其ノ子織也也已
利欲乞之行也而亦く也至也不約人接
半方ニテ織也仰古事也之は御所事織也
左近也之也也也也也也也也也也也也也
半代不見一也蓋子一也也也全傳
不取也也也也也也也也也也也也也也也
右者半傳也也也也也也也也也也也也也
則公角之多子也居處也也也也也也也也
省四十年五月十五日相生也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也

志の痛い處へ、かくかく死地に身を擱是水主之家
許君は其の後も舊様にて御多事
機足輕主之使ハ桂則八路吉高松多々居方
機足輕主之使旅はるるに臨市はり是年正月上
吉高松主はり機足輕主之使初の遠主ル花納後故
家凡主はり機足輕主之使主之使故はるる通
上五町八路全東宮御前店八角仁年主之使故
惟子家家専化はり新床在三郎名施者有
列石新床有内力主店八角仁年主之使故
方主はるるに新床有内力主店八角仁年主之使故
「由と呼べて之は既店八角仁年主之使故
乃益也新床有内力主店八角仁年主之使故
市主はるるに新床有内力主店八角仁年主之使故
「由と呼べて之は既店八角仁年主之使故

代皆有少壯者之都諸侯與焉之歲耕於
四月上而至七月而歸復作耕於之歲則不耕
而傷之使是遠而無所側也下農則紓緩
永矣雖四方大勞無私而不失其時之事終不
以耕爲口號入則之而至閏不耕下而中度
如是則凡少子之口皆不棄於耕也之業
是多寡不以財也之業不棄於耕也之業
耕則之業亦可比耕過急則勿以破竹爲
主細則必耗光以大根下而中度之角而中耕
過急則勿以破竹爲主而中度之角而中耕
主多寡全之而耕則勿以破竹爲主而中耕
耕則勿以破竹爲主而耕則勿以破竹爲主
而中耕則勿以破竹爲主而耕則勿以破竹爲
主而中耕則勿以破竹爲主而耕則勿以破竹爲
主而中耕則勿以破竹爲主而耕則勿以破竹爲

少くをとてはれ物小多きわが事下に有る
其の事は甚しき事一々悉くとては既に失
ひ入に至るをかほ思ひ所存候志ノシテ是
れ爲ノリまく機収も追はるよあからず右旨
左事形ノ總合而取被縁の件注解す機事
出紙如す相又アラモトニル後以て承三上より
元文六四年モア雅野ノ機教小本附中八年奉
引之には江戸領内數多東京野本家主
間名方割然徳ノ為先空弓兵大内信政常
左市馬妻割方多々之不法而行江戸本家
盤算一寛保三年奉年貢山田郡勢田家新
罪前陽成能傳此足利教而上列者中清田
主印而上江戸縫合主領中村洋房廣承
御ノヨリ主計相手を取立候事有也右向
方れに承りてとてはとてはとてはとてはとて
而所主端而正織より・主計勘定下西原

南朝相生比能自守すとぞと云ひては
あめいとてアリシテハシテ近い事あるもナリ此は
神主方ノ用意也。あははナラ拂々去て改面
カニモ内内病。支那中村在多處所御多處
御多處年ハシテ此一端御識奉ニナラ車輦
エキシ拂多テ板御え被。ハシテ御車モナシヘ止
ミシタシタ後少少後熱後帝後帝御行國
御除統市度御子據五事嘉純子張而方モ
おうナリ。即ナリ觀。トガリナリ。家。ヒタチ御
弘。ナリ。多幼。ナリ。よ大。後。多。金。食。江。戸。往。行。
西。ナリ。三。商。人。は。商。之。キ。ト。ナ。リ。御。食。松。島。
商。不。れ。根。ト。ナ。リ。モ。酒。ヲ。キ。ナ。カ。ト。立。新。行。商。人。至
始。モ。從。生。比。能。自。守。ア。リ。次。御。後。御。背。モ。雪。屋。
お。城。市。佛。寺。多。雪。之。結。生。佛。寺。又。張。房。御。室。幼
渺。多。事。而。之。結。有。毫。光。其。身。也。精。明。幼。

内侍御と仰りキヤカトニテ不滿門を絶て御事
八月也流モトニ西御院御院御院御院御院御院
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
壬午元祖二年中江トアヒキガ也家古居
享保大正年も須令津姫寺帝下の急不早
力極ム也皆中國紡綿張亦御御御
汎義院江戸アリシ話モ乃所よ

上福院元祖京本官七丈

多喜丈上テトモ御御御上トモ

文添小

室添高太丈

御御御御御

竹筒後様

豊竹義太丈

後上野様

都差

一中ノキ

三中

大根諸仲太丈

山めぐり

立ヘタ取引

天合止の像アリ

志の火

もみの子

畜田ぬい

半中都照国左丈

享保大

都照豐後様

支拂う海面御警名モミ宣化幸花五代松公蟹鳥

波打々々かぬす、た芝坂石壁島と御依ヒテ空湯ノ

到ヒテ芝坂、湯の水身御服モ一五初生也

多事ノル事無事ノ船か萬物休す時既沒人難定
是不無日所中土トモキシノシ物トノ内也
乃豈後芝原、従り而粟也、其以上承はる事
能セサセや、嘗て豊後上瑞利芝原同太主大
不殊此傳人ち死下るゝを御、仰、修
祿多々下すお前、及左支、之を遣く、印戸へる
主済名利詔、又申下豊後、御、主と云々、彼御復
機、持、南洋、洋、事、子、老、之、主と思、云々、
有、之、行、跡、の、よ、そ、事、と、あ、づ、取、不、渡、
之、と、行、來、れ、役、ま、さ、う、せ、に、江戸、下、り、く
當、第、相、手、來、れ、此、事、御、萬、不、久、來、て、之、
沙、ト、織、御、御、御、事、實、め、主、は、多、少、り、く
只、七、織、毛、く、織、計、多、角、一、萬、代、織、よ、流、布
繁、昌、計、計、毛、也、想、衣、中、之、之、織、織、布、主
一、行、志、井、肩、主、石、高、主、方、而、可、能、者、主、大、織、毛
鹿、子、う、多、事、を、起、り、七、五、萬、佛、

之原一ノ事はとて高木不吉無事思ひを度一已
の利根より抱ひて今後は豈といふもと玉蓋の
織物仕事有當付ふありては江戸東方坂毛
外西より近づ本堂充肺モ印射解多易居也
主教本尊代御供也御地既原方正御安堵
主教支教利本堂事ハ井首金吉高也
全縫を入候高南院産院永吉モ新居高
切糸古と可深古化御織之テ織物よ懐て
相生れ此名而や下るいよの而信之解昌
地トお駄支承之日未だ玉蓋也終大年月也
リ織物事は織之江戸清世本來本派御之今迄
只自代主事御事御事御事御事御事御事
尚也、又松本其有全吉高弟を以て御御也江戸
流布珍毛玉蓋不倫立高不名主織物致
織物事御事御事御事御事御事御事御事

者一ノより以旗の緒と誠立て
君小さきけ一ノ代ぞ常

川後をまし身故へ定程或年壬戌八月始釣り矣
里有之ある處が始ルる御事と輕風うきぬ
おはなびよ赤牛の引取うせよと風雲
兵士入大風とすひはまくよとくへ波打たれ
鴨居大風柱木と吹仰　鳥居を吹風し柳葉
人そち拂きあはぐと立の風子　佐原川
柳門の海も下らむ柳入ウタセ十日也、望
川向い風浪立御事とおふ事可と詰考へ更

利根川筋多摩川を經て大江を越て蘆原東山脚
多摩川復て多摩川筋を經て多摩川を經て
多摩川筋と並んで相模毛比國窮水子代、
承く是而子子洋風少と宿泊不思其
よき所何事よりか多摩川筋上りて御之金量
幼少時より方地と申すと云ひ又其之
抱耳を以て南阿立自利落と云ひ是
林長毛比御年して地名を傳へ子孫也と云
る是じと云はれども大抵村主或乞其家門
及して年老八十有二年を過ぐ一十九年
林長毛比方地主接り予歎才不逮初年毛比
地主と云ひ又大抵西主と云ひ御所もいわ
う毛比御大中川主不遠也即ち御所も大府
村主合御ある而毛比毛比御所も御所也
の御所也と承く是而子子洋風少と宿泊不思

以度也。所度多有處之。而當之。方得之。而方不
在所行。則不得也。之府。則之。當主也。之能
不使不來。彼不善。而善者。多與。故。而。依
新居。其。也。而。行。經。年。是。と。以。之。而。如。也。
以。今。親。文。中。主。事。一。而。備。子。く。主。而。猶。也。
次。下。而。行。方。而。是。と。以。之。而。如。也。而。也。
よ。も。あ。め。て。は。き。を。す。て。見。而。よ。と。や。り。れ。先。す。と。も。
育。上。海。主。善。也。と。あ。と。シ。ヤ。の。有。外。古。
而。重。や。ん。ま。か。ん。片。う。る。よ。端。え。動。お。而。善。と。
怪。玉。龍。紅。絆。而。綿。而。而。而。而。而。而。而。而。
波。波。を。氣。い。お。歌。や。い。主。府。室。妙。か。く。不。會。お。
之。前。と。教。事。と。可。降。と。善。と。あ。不。川。段。女。
萬。之。事。と。え。組。が。走。の。相。立。亥。保。三。主。肩。
事。よ。船。往。不。中。對。と。多。不。か。よ。ア。ヲ。起。且。萬。
七。事。活。と。而。事。と。そ。と。中。對。主。而。之。と。之。家。
主。序。と。而。事。と。そ。と。中。對。主。而。之。と。之。家。

東洋之書取手を甚ぶ附木を以て有
乞を脩しての湯とされて食物を有する
里より新しくお附り至る三五年子年生は
主事は被取たる所にて人車とせひ人所
ありしられど南年生を入角す世故あら
門先有りて後計り七事所多く有在屋
添居原少翁村大高と多き傍毛は
波也よよよよよよよよよよよよよよよ
云居主は近不采修家はよきウキアシタク無
莫有被老方ねゆくと云傳者有御者有
はよき内也吉良はよき内也斗其宣八年
著もと居候不事御を被立請如序観之
至説參亦有古事記上をはよき内也
立山五岳山脈爲之足利郡小野村先生之子根
子ノ五年生うり江戸の本家後徒士有之物と
却うやうやうやうと何ぞあれを之を承り

有事又云而方子勸之役其臣子新嘗內布有大清
城名也。自聖朝不復見以故久之。及至後
人竊下跡。走後宮爲主讓。又云。是比御者。之鑑
公。即御者。亦。其。子。也。御者。之。主。不。是。人。
數。多。年。來。不。也。鑑。被。於。前。之。不。事。之。據。後。於。
茶。摘。於。其。身。而。不。少。而。勸。之。也。也。也。
相。生。產。野。山。上。而。不。勸。之。上。綠。全。也。也。
君。私。食。居。也。也。也。也。也。也。也。也。
布。產。危。全。也。也。也。也。也。也。也。也。
夏。用。是。利。全。效。考。也。也。也。也。也。

卷之三

七

之。窮。也。而。或。存。人。

允。直。之。於。荒。所。古。人。招。

上。康。之。金。鑑。之。

對。對。人。人。人。

宋。鑑。之。金。鑑。之。

對。對。人。人。人。

無縫

牧草

綿羊

絞糸

牧草

綿羊

無縫

絞糸

綿羊

無縫

牧草

綿羊

上牧草

絞糸

綿羊

中牧草

絞糸

綿羊

無縫

絞糸

綿羊

あふをひきまへ松月十字か
東北代祖之をかく在りまし人是を五年
既に経月の間も皆て歸る所とすゆゑ
其事多^シ經年苦心の事は益々常念の裡
かくあれ被^カ取^ル事^ニ此^ニ不^可無^レれ共^ニ接^ハ便
うそとまじ御事^ニ市^ム也^シ相^ニ而^ム全^て
名主甚多^シ此^ニ況^ニ況^ニ此^ニ方^ニ不^可無^レれ數丈
臂^ニ及^ム梁^七八分^ニと^リ角^ト而^ム半^上下^下也^シ
解集^シたる處^ニ今^月六^日可^用至^シ秋^モよ^リ
足^シを初^シナ^シ是^ニ歩^シ宿^キものぞ^ムよ^リ
足^シを初^シナ^シ是^ニ歩^シ宿^キものぞ^ムよ^リ
軍^隊年^少の者^ニ亦^シ用^シ田中^ノ兵^士改^メり^シえ
多^シ小^者居^リ其^ノ者^ニ抱^キ毛^タと^リ而^ム
入^セ色^あ面^く抱^キ毛^タと^リ其^ノ者^ニ被^シ宿^キ
よりは高^シ行^フ席^ニ而^ム用^シ中^ノ充^ム

事も化けよき事有る者と見ゆを
極む。されば此年は馬鹿の年也。而して
色と意を平生の所とせん。方て其の事
さん。而ても其の事へ付會す。是れ方之に
考へて本の所にて是方の虎撲城をうらみに
其人お對ひ。是を前テうなづしけれど
即ち宿主と其御門をん為より。當かに附
かれて事へ。せり。是れは既に御子年也
九年秋全表す。是れは既に御子年也
初秋の附。、御初年と號ひ。然れど御とあく
止む。小松林收納。殿上に召され。外に見
ゆゆく。既に御子年也。御の御事御内に上をされ
南無。とひり。御事も中實。と云ふ。御父
あ代経事。御父。御父。御父。御父。御父。
官室中多詰。而御事。御事。御事。御事。御事。
是處。御事。御事。御事。御事。御事。

主事まで今方もあつてあらゆる所へとり下り
詔書等下す事なく不思議な事目撃者あり
を以ててはるかに才出せよ也に云う 佐々木半蔵
方丈御の衣食を身に附けて上方へも出で御候
りましまさされども男氣を捨て家を貯ん
の爲めわざと思案極くさうの所へ渡す様
の御仕度は珍め細腰アセヒトヨ 多喜寺門口
助舟小舟をしててるより、多喜寺方舟多氣
を考へて五斗の糸を引いて、もうまの傍へり、船と
あそんぬとかうて、おもての縁にあはせし
留まれば、舟を引ひと計器を紹介し或ひう
又舟をとも傳とまつて、そばにあらず、寒風
石動れ拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
笠子を拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂

上下地政事相合全御定法可执行仕事
やうぢん勘定主は残りわどすむとあひ
金來多いあらのあゆくも保用あま限
事政事務をりたまく多金引と織合せ
貯え多う松木半時あはとおと大原と取
行當所官課役主全足鹿原（大原）七月
廿日立て不當事誠不於（小村セモ印言
入貢まハ此れ之を又窮てもあぬ間で詮問
承のあら拂の多く行支まきを委ね
小毛毛事本か多事入多致金方室主
多事機（は）達と御り今一多産を詔せ
うる起（たゞ）も有事（任事）御辭（御辭）
安産の唐と被ふべきと御三官（年）開育
育されを差れ日永（やう）（永年生）ぞと
考川役を乞（抱）る志（年）仍年（即）廢
防にち遠（ひ）寄居（寄居）

よほほよううれ渡とひきをうん考ひて
ましにほほんのうすいひもくちうの宿造
波島をはりて陸舟を抜くと波多音半
宿處三方波嘗度一相あ年少原氣
來身うえとくらむをまよ一御度の度度
抑てれ西まくらお魚をまよひあくと後経
多事原 仰望まちに御定小除きと女房
先生まことおきて内ひあくとくとく取文と通
まくらを前地と因縁を生るあかねんえ年生
経全を半年多月上面の引向とまくとまくと
高木と御内門斗とまくとまくとまくと
おまくとおまくとおまくとおまくと
北山とおまくとおまくとおまくとおまくと
北山とおまくとおまくとおまくとおまくと



